

教育改善プロジェクト報告

ESPII の効果的な実施のために —他部局協力教員によるテーマ別クラス—

水野真理子, 山岸倫子, 木村裕三

令和4年度に開始した教養英語新カリキュラムでは、基盤英語 I、II によって、TOEIC 受験を視野に入れた英語学習や e-learning による自律的な学びの促進を行うことを一つの柱とする一方で、ESPII においては、学生が興味関心を持つ学問内容や教員が得意とする分野の内容、ならびに二年次以降における専門科目と関連した内容を扱うクラスを、選択制の形で実施している。その効果的な実施、運営に際しては、クラス選択プロセスをいかに円滑化するか、また、他部局教員で英語教育に関心のある先生方の協力をいかに得るかということが重要である。本稿では 2022 年度開始の ESPII の実施方法をより改善していくための前段階として、2019 年度から行ってきたテーマ別クラスについてその経緯や問題点などを振り返り、今後の授業体制のあり方を考える上での一助としたい。

1. はじめに

グローバル化が進んでいく世界の状況において、英語を一つの共通言語として活用することの重要性はますます高まっている。文部科学省は、小・中・高等学校において外国語（英語）教育の強化を掲げ、国立大学をはじめとする高等教育機関においては、グローバル化に対応できる高等教育の国際化を大きな目標の一つに挙げている¹。大学の国際化や国際的交流を達成するためには、その基盤としての語学習得は必須である。そうした背景を踏まえて、本学においても教養英語のカリキュラム改革を、英語分科会内に設置した外国語部会英語分科会カリキュラム検討 WG（座長木村裕三、以下 WG と記す）の主導によって検討してきた²。カリキュラム改革の大きな柱の一つは、TOEIC 試験による客観的な英語能力指標を学生の英語学習に活用し、英語運用能力向上をはかることであった。その一方

¹ 文部科学省ホームページ、国立大学改革プランを参照。2022年9月23日アクセス。
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1418116.htm

² 歴代外国語部会英語分科会カリキュラム検討 WG メンバーとその主な活動、および改革の詳細については、木村裕三他「富山大学教養英語カリキュラム改革—2022（令和4）年度からの実施に向けた軌跡」『富山大学教養教育院紀要』3号、2022年3月11日を参照されたい。

で、WG 内には TOEIC 偏重に対する懸念の声もあった。TOEIC のような英語運用能力試験で高得点を獲得するために、英語そのものを学習するというだけでなく、自ら問題点を発見して学んでいくという大学生としてあるべき姿を重視し、英語を通じて個々の関心に沿った学問分野を学ぶことができるような英語科目を設置できないか、そうした思いも WG 内で共有されていた。それと同時に、教養教育が全学出動体制であるということ、また全体で 168 のクラスが存在する大規模な英語科目を担当する教員数が十分ではないという問題からも、他部局における英語運用能力の高い教員に協力を仰ぎ、英語分科会以外の他部局協力教員によって、各教員の専門分野に関する初級的な内容を、英語を介して教授するということも可能ではないかとの案が生まれた。それにより、授業内容に多様性が生まれ、また教養教育と専門教育の接続が促される可能性も考えられた。こうした議論を踏まえ、2018（平成 30）年度から、テーマ別クラスについて検討を開始した。この選択制テーマ別クラス実施が、2022（令和 4）年度からの新カリキュラムにおける ESPII（English for Specific Purposes の略）への他部局協力教員参画の母体ともなった。本稿では、2019 年度からの選択制テーマ別クラス実施の経緯や問題点を振り返り、今後の ESPII 実施の効果的な授業体制を模索していく上での一助としたい。

2. 選択制テーマ別クラス実施の経緯

2-1. 2019 年度テーマ別クラス

2018（平成 30）年 9 月に、他部局教員の協力を得るための最初のアンケート「教養教育の『英語』教育に関するアンケート」が行われた。この背景としては、大学の長年にわたる懸案事項であった教養教育一元化が 2018 年 4 月について実行され、さらに 4 年後の 2022 年度を見据えてのカリキュラム改革を始動しなければいけない状況があった。英語科目には特に改革への大きな期待がかかっており、習熟度別クラス編成の導入やグローバル人材育成への対応などを新カリキュラムに盛り込むべく、WG 内でカリキュラム改革への議論を活発化させていた。

このアンケートは教養教育院長名で、和漢医薬学総合研究所、附属病院、医学部臨床系専任教員及び特命教員を除く、各学部の教員を対象に実施された。アンケート内容としては、①担当可能な形態（単独で 15 回担当／複数教員で 15 回担当／所属部会の授業担当が無ければ単独で 15 回担当/所属部会の授業担当が無ければ複数教員で 15 回担当）②外国語部会からの支援（教科書や成績評価）の必要性について（支援があれば担当可能/支援は必要ない）③授業の種類について（読み書き中心のリテラシー科目／四技能に配慮したコミュニケーション科目/どちらでも可能）④開講学期について（前期／後期／どちらでも可能）⑤履修学生について（理系クラス／文系クラス／自身の所属学部学生のクラス／どのクラスでも可能）⑥担当可能な時間割について（曜日・時限）、以上の項目を問うものであった。

初めての試行錯誤的な試みでもあったため、各教員にその意図が十分に伝わっていなかったことが原因として考えられるが、担当可能との回答を得て、実際に授業担当へと結実することができたのは、工学部教員 1 名のみであった。しかし、このような暗中模索の試みにおいて、手を挙げていただいたことは非常に有難いことであった。2019 年度前期の英語リテラシー I を 15 回分、通常の時間割枠の中

でご担当いただくこととなった。

2-2. 2020 年度テーマ別クラス

2018 年度のアンケートは、まずは試行的側面が強かったが、2019 年度においては WG 内での議論を深め、また教養教育支援室との意見交換を踏まえて、アンケート実施へと動いた。WG 内では、他学部の協力教員をどのように掘り起こすのかという議論がなされ、その一策として、他部局協力教員へのインセンティブ供与を考える必要があるのではないかという意見が出た。例えば教材費の拠出などが一案として出されたが、しかし、その経費拠出先をどうするか、また教養英語担当のみにそのようなインセンティブを供与することは難しいのではないかという意見も出た。この議論が示しているのは、教養担当を決める部会制度がはらむ限界や問題点であった。所属部会が受け持つ担当科目以外の、他部会の科目を引き受ける際には、どうしても担当者のボランティア意識や自発性に頼らざるを得ないという難点があった。そのため、他部局教員の協力を要請する際には、WG メンバーの人脈に頼り、個別的な依頼を重ねていく必要があった。

こうした問題点を WG 内で認識しつつ、アンケート実施は 2018 年度と同様の時期、質問内容、手順で行われた。その結果、17 名の教員から回答を得た。各教員がそれぞれの職務に多忙な中で、昨年度よりも多数の回答を得られたことは、非常に有難いことであった。その後、回答結果にもとづいて、実際の担当可能性に向けての作業が始まった。まずは単独での担当可能と回答のあった教員へ、アンケートへの協力依頼のお礼とならびに担当の意志の確認を行い、教養英語の科目の目的や概要、学生のレベルや傾向、授業内の様子、教科書選択についての助言など、WG 内のメンバーが各教員とコミュニケーションを取った。また複数教員での担当が可能と回答のあった教員については、その教員間でのオムニバス形式の英語授業担当が可能かどうか、そのマッチングを行う必要があった。単独での担当可能教員の場合と同様に、アンケートへの協力依頼のお礼、ならびに担当の意志の確認を行い、さらにはオムニバス形式での英語授業をどのようなテーマや内容で行うかという相談のためのミーティングを、数回実施した。こうした地道な、時間のかかる作業を経て、2020 年度には、都市デザイン学部とアドミッションセンターから単独担当で 2 科目、医学部医学科の 4 名の教員によるオムニバス形式で 1 科目、また医学部看護学科の 2 名の教員による担当で 1 科目、計 4 科目を新規に立てることができた。加えて前年度に協力いただいた工学部の教員にも、継続して担当いただけることとなり合計 5 科目が設置された。そのうち 1 科目が前期に、残りの 4 科目が後期に開講となった。これらの授業内容は、気候変動に関する科学英語、科学英語ライティング、経済学に関する専門・時事英語、医学に関する論文リサーチ・英語プレゼンテーション、看護に関する基礎的な英文読解であり、それぞれ学生の学問的興味を刺激するような内容であった。

また設置する曜日・時限についても工夫が必要であり、なおかつそこにも問題点が見出された。2021（令和 3）年度までの教養英語科目は、学生が各学部学科群（五福文系、五福理系、医学部医学科、看護学科、薬学部、芸術文化学部）の 6 グループに分類されており、そのグループ内で学籍番号にもとづいて学生のクラスが割り振られていた。テーマ別クラスのうち、医学部医学科複数名教員担当のク

ラスと看護学科教員 2 名での担当クラスは、通常の指定クラスの中に含めた。というのは、それら両クラスでは、医学科や看護学科学生の専門に合致した内容が展開される予定だったためである。一方、5 科目のうち 3 科目は、学生による選択制とした。選択できる学生は、はじめに指定されている英語クラスの曜日・時限と同じ曜日・時限である場合に、指定されているクラスから抜けて希望するテーマ別クラスに入ることができるという、曜日・時限の制約を伴うものであった。言い換えれば、指定の英語クラスから抜けて、テーマ別クラスを希望したいという学生がいたとしても、その学生の指定の英語クラスの曜日・時限が、希望するテーマ別クラスの曜日・時限と合致しなければ、履修はできないということであった。そのため、履修希望者が少なくなることが見込まれ、担当教員の熱意に対して申し訳ないという思いがあった。

こうした制約がある中で、より多くの学生に授業を希望してもらうためには、学生への周知をいかに行うかということが重要であった。前期開講の 1 つのテーマ別クラスについては、まだ入学したばかりの、いまだ大学の全体像や履修状況なども把握できていない学生に向けて、テーマ別クラスの紹介を行い、履修希望へと導かなければいけないという困難さがあった。そこで各学部のオリエンテーション時に、WG メンバーが分担して出向き、テーマ別クラスの説明を行うこととなった。説明するプレゼンテーション資料を作成し、合計 8 会場で説明することとした。しかしながら、4 月には新型コロナウイルスの流行という事態が発生し、対面でのテーマ別クラス説明は一部のオリエンテーション会場のみで行うこととなった。対面での説明以外には、前期、後期ともに掲示板やヘルンシステム、Moodle などを活用した周知方法で実施した。その結果、各テーマ別クラスの希望者は 3 名から 10 名程度の少人数となった。ただ、希望した学生は明確な目的と高い意欲を持った学生たちであり、授業への取り組みに関しては積極的であるという好意的な声が担当教員から寄せられた。少人数クラスであるという利点はあるながらも、どのように学生たちに効果的に周知するのか、また曜日・時限の制約をどう克服するかという点が改めて課題として浮かび上がった。

2-3. 2021 年度

2021 年度のテーマ別クラス実施に向けても、これまでと同様に各教員に向けてアンケート調査を行った。その結果、前期に 3 科目、後期に 4 科目の計 7 科目を選択制テーマ別クラスとして設置することができた。経済学部から 2 名、工学部から 1 名、国際機構から 2 名、研究推進機構から 1 名の教員に担当いただいた。また、看護学科の 2 名の教員にも引き続き、看護学科学生対象の指定英語クラスで教授いただいた。2019 年度から始めたテーマ別クラスも 3 年目となり、実施に関しても軌道に乗り、また授業内容についても多様性がみられ、テーマ別クラスとしての体裁がかなり整ってきたように思われた。科学的な英語記事の読解とディスカッション、訴訟問題に関する法律英語、材料物理学に関する英文読解、法律問題に関する英字新聞記事の読解、化学英語表現の習得、環境生理学を英語で学ぶ、看護に関する基礎的な英文読解などが展開された。その一方で、担当可能教員への依頼、説明などは、個別に丁寧に実施しなければならず、地道な、多くの時間を要する作業であることには変わりはない。また、依然として受講希望者の人数が 10 名前後と少ない数にとどまった。

3. テーマ別クラス実施を踏まえた 2022 年度 ESPII の実施

以上のように 2021 年度までの旧カリキュラムにおいて、選択制テーマ別クラスの実施を一步、一步進めて行ってきた。やはり特筆すべき問題点は、①他部局協力教員の確保②周知の方法であろう。このテーマ別クラスの実践と問題点を踏まえて、2022 年度から開講したクラスが後期 ESPII である。ESPII では英語分科会所属の専任教員や非常勤講師によって、テーマ性を持った英語授業を展開し、各学生は指定された曜日・期限内に開講されている 7~10 の英語科目から、それぞれの興味関心にもとづきクラスを選択して履修する。それらの開講科目の中に、他部局教員による授業実施も含まれる。他部局協力教員の数が多くなればなるほど、授業選択の数と内容の幅は増大することとなる。その観点から、他部局協力教員の確保をいかに行うかという①の課題は、いまだ適切な答えが得られない難題である。2022 年度から教養教育院内の組織、会議体系、委員会の改変が行われ、これまでの部会制度による教養科目の運営ではなく、部会の上に部門を設置し、教養教育院所属の教員がその各部門に所属して、教養科目の管理・運営を担当するという形態になった³。したがって、部会の構成員は授業担当を主として行うという形に改変された(図 1)。そして教養教育院長から直接的に各部局長へ、教養科目担当の依頼を行うことができる道筋もできた。この ESPII 担当者の確保についても、こうした院長から各部局長へ依頼するという経路を活用することも、今後検討する必要もあるのだが、協力教員の授業担当への意欲、自発性を重んじることが重要であると考えられ、これまでと同様にアンケートに回答していただいた教員と協力関係を築きながら実施していくことが、現段階では適切な方法ではないかと考えている。2022 年度 ESPII のためのアンケート実施も、これまでの手順と同様に 2021 年度に行った。9 月にアンケートを取り、10 月から回答を取りまとめ、担当可能教員との相談を行うという手順を踏んだ。新カリキュラムであったということから、カリキュラムに関しての丁寧な説明が先年度よりも必要であったため、オンラインでの説明会も数回実施した。その結果、8 科目の他部局協力教員による授業を設置することとなった。

また、②の周知の方法に関しても、ESPII において同様に困難さが伴っている。さまざまな特徴を持つクラスを学生に理解してもらうためには、シラバスの書き方を工夫しなくてはならない。今回、シラバス執筆に際しては、これまで以上の詳細な説明を行った。授業計画を記載する欄の上部に、150~200 字程度を目安とした、その授業内容や目的、習得できる技術などを明解に説明する文章を記載してもらえるように、各担当教員に依頼した。ただ、その徹底にも時間がかかり、シラバスチェックを何度か重ねて、個別にその説明文記載を再三依頼しなければいけない場合もあった。また、学生がシラバスをどの程度読むのかという点にも不安が残る。ESPII の選択方法についての詳細な説明や分析は別稿に譲りたいが、簡潔に示すと、7 月中旬から支援室主導で ESPII の希望調査を Moodle 上に設置した Google フォームを活用して行った。学生は第 1 希望から第 5 希望までを記載する。第 1 希望の人数が多い場合は抽選となった。そのクラス分け結果を概観したところ、学生のクラス選択を決定づ

³ 本稿執筆者の水野と山岸は、国際教育部門に所属し、主に英語科目の管理・運営を責務としている。

けるものとして、授業内容だけではなく別の要素がかなり働いていることが推測されている。なぜなら、各学部学科の学生の興味が高いと考えられる、専門に寄り添った内容の授業の希望者が少ないという状況も散見されたからである。授業内における活動負担（課題の内容や頻度）がどうかという点から、消極的にクラスを選択していると思われる学生も多く見受けられる。今後、より詳細な分析を行いたいと考えているが、この事例からは、学生へのテーマ別クラスの趣旨説明、その周知をどのように効果的に行うかという点と、テーマ別クラスにおける授業内容をどう設定するべきかという問題点が見えてくる。

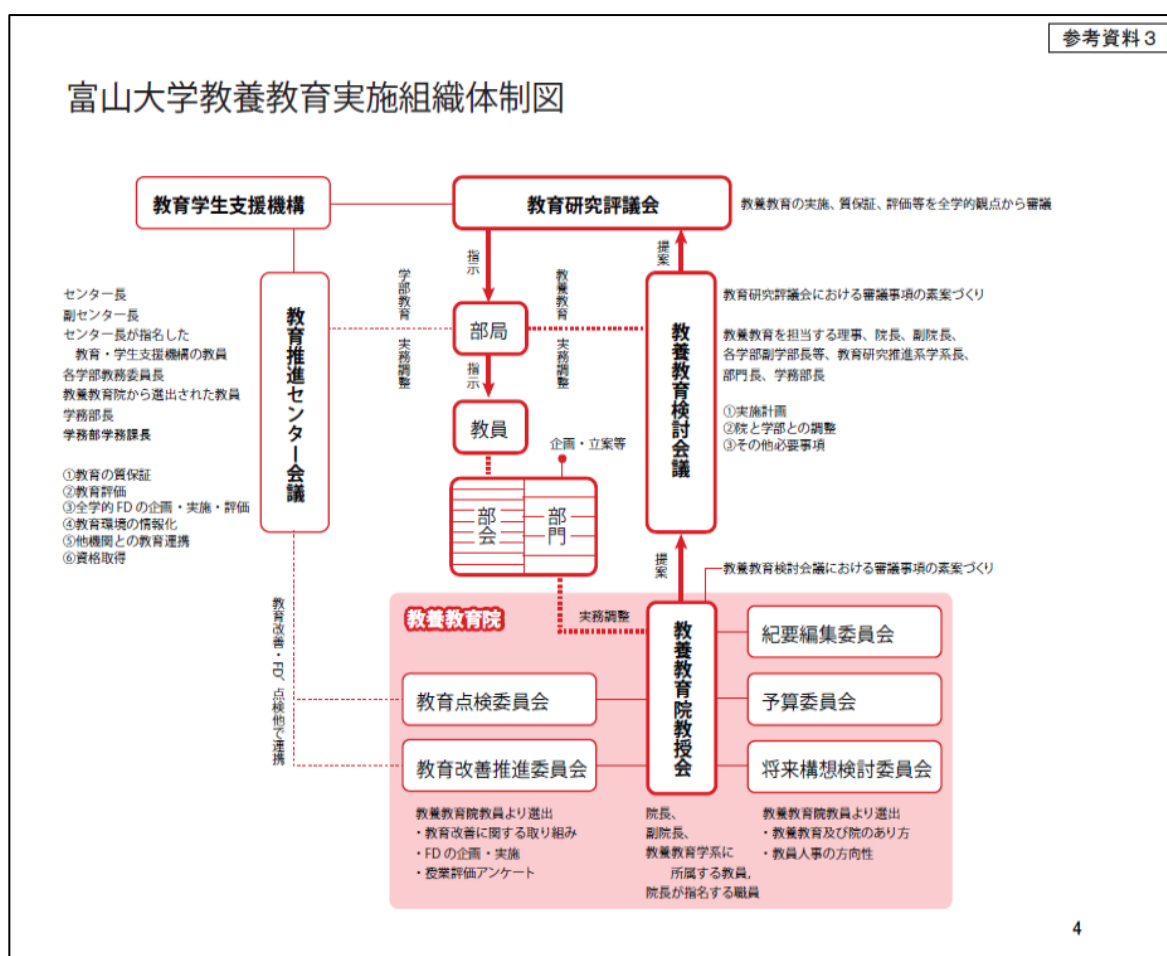


図 1 2022 年度第 1 回教養教育検討会議資料より

4. まとめ

以上のように 2022 年度からの ESPII の効果的な実施を探っていくために、これまでの選択制テーマ別クラスの経緯と問題点を振り返りながら、2022 年度の ESPII 開始直前までの様子を追った。学生の求める英語授業の形、教員側の英語教育に対する考え、富山大学として達成すべき英語教育のあり方、また社会から大学に求められる英語教育の水準、こうしたさまざまな要素を踏まえ、英語カリキュラムの改善・改革は実施していかなければいけない。新カリキュラムにおける ESPII は英語を介

して学ぶという語学習得の一つの理想の形を追求したものとして、有効性と将来性を持つ科目であると筆者は考えているが、その成功の鍵は、効果的な実施方法の確立にあるとも言えるだろう。今後も問題点を一つずつ解決し、ESPII 科目の運営、改善を進めていきたい。

水野真理子

教養教育院

山岸倫子

教養教育院

木村裕三

医学部